



特集
僕はどうして
働いているんだっけ？

コラム

武蔵大学社会学部助教
(社会学・男性学・キャリア教育論)

田中 俊之 さん

り
ふ
る

さ
っ
ぽ
ろ

僕はどうして 働いているんだっけ？

男が働くのは「当たり前」という根強い常識

若手会社員のみなさんは、10年も勤めれば、落ち着いて仕事がこなせると考えているのではないのでしょうか。しかし、現実とは違います。40年間勤め上げた定年退職者の男性たちにインタビューをした経験がありますが、若手の頃とは質が違っていても、20年後、30年後も仕事に対する戸惑いがなくなるわけではありません。

若い人ほど早く安定したいと考えがちですが、仕事の面だけで考えても安定など幻想です。そもそも、実現したい安定とは何でしょうか。そして、どうして安定することにこだわってしまうのでしょうか。問題の背景には、皆さんが単なるビジネスパーソンではなく、ビジネスマン、つまり男であるからこそこの背景があります。



働く、働かないは自分で決める

『男が働かない、いいじゃないか！』（講談社プラスα新書）の中で、僕はこのように書きました。多くの男性は、学

校を卒業後は正社員として就職し、定年退職まで40年間に渡って働き続けるというルールに疑問を持ったことさえないはず。しかし、長い会社員生活を考えた時、「当たり前」だから働くのか、自分で選択した上で働くのかでは大きな違いがあります。選ぶということは、自分の選択に「責任」を持つことだからです。どちらが仕事に真剣に向き合えるかは明白だと思います。

「男は仕事、女は家庭」から「男も女も、仕事も家庭も」へ

女性活躍や働き方改革といった話題を、よく耳にするようになりましたね。こうした社会の流れについて簡単にまとめると、夫婦のあり方を「男は仕事、女は家庭」から「男も女も、仕事も家庭も」へと転換するための取り組みがなされているということです。

従来は、男性が一家の大黒柱として稼ぎ手としての責任を担ってきましたが、共働きが普及して、家計の責任を夫婦で担うようになれば、世帯でいくら収入があるかが重要になります。ひと昔前であれば、妻に自分以上の収入があることを、快く思わない男性は少なくありませんでした。妻が外で働くのを認めない男性さえいました。考えてみて欲しいのですが、こういった価値

観は、女性の生き方を縛るだけではなく、男性を仕事一辺倒の生活に追い込むのです。

女性活躍と言うと女性のための政策というイメージが強いかもしれませんが、しかし、家庭での経済的責任が軽くなるわけですから、男性にとっても大きなメリットがあります。男性だけが自分の稼ぎがないと家族に迷惑をかけるなどと考えないですむようになるのです。これから家庭を作っていく男性には、「妻がたくさん稼いでくれるのならラッキーである」と心の底から思えるような感受性が求められています。

ただし、夫婦で家計責任を分担するようになっても、それだけでは、男性と仕事の固い結びつきは解消しない可能性があります。この問題は、男女の関係だけではなく、男性間の上下関係、つまり、男性同士の見栄の張り合いとしての側面を持っているからです。とりわけ分かりやすい指標として年収にこだわる男性がたくさんいます。

男の価値は年収ではない

同世代の平均、高校・大学の同級生スポーツ選手・芸能人、あるいはもっといい職業に就いていたはずの自分など、いろいろでしようが、常に比較対象は女性ではなく男性です。女性は結婚相手の年収ばかりを気にしているという男性からの愚痴を、ネットなどではよく見かけます。しかし、年収だけを基準に男性を評価する価値観の背景には、男性同士が競い合って、勝つただの負けただの言っている現実があるので。男性はこの事実を自覚する必要があります。

男の価値と年収を切り離すためには、仕事を人生の目的とするのではなく、生活費を得る手段として割り切るという考えもあります。大切にしたいものが家庭や趣味ならば、仕事にそこまで入れ込む必要はないからです。言い方を変えると、年収が高くて、家庭生活や趣味など仕事以外の面では充実して

いないかもしれませんが、さらに言えば、やりがいを持って働いているかどうかも分からないのです。



年収800万円の男性が、年収400万円の男性より、あらゆる角度から見て2倍偉いわけでも、2倍優れているわけでもありません。客観的な事実としては、年収に2倍の差があるだけです。仕事中心の人生を歩んでいる「勝ち組」の男性からすれば、「負け惜しみ」に聞こえることでしょう。こうした狭い視野からは、仕事の外の世界で起きている時代の変化が見えません。先頭集団にいないつもりが、後ろを振り返ると誰もいなかったなんてことになりませんように。



武蔵大学社会学部助教
(社会学・男性学・キャリア教育論)

田中 俊之さん

Toshiyuki Tanaka

1975年生まれ。社会学博士。著書『男がづらいよー絶望の時代の希望の男性学』KADOKAWA、『(40男)はなぜ嫌われるか』イースト新書、『男が働かない、いいじゃないか!』講談社プラスα新書。『日本では“男”であることと“働く”ということとの結びつきがあまりにも強すぎる』と警鐘を鳴らしている男性学の第一人者。

「男性だからこうでなきや！」

それって本当？

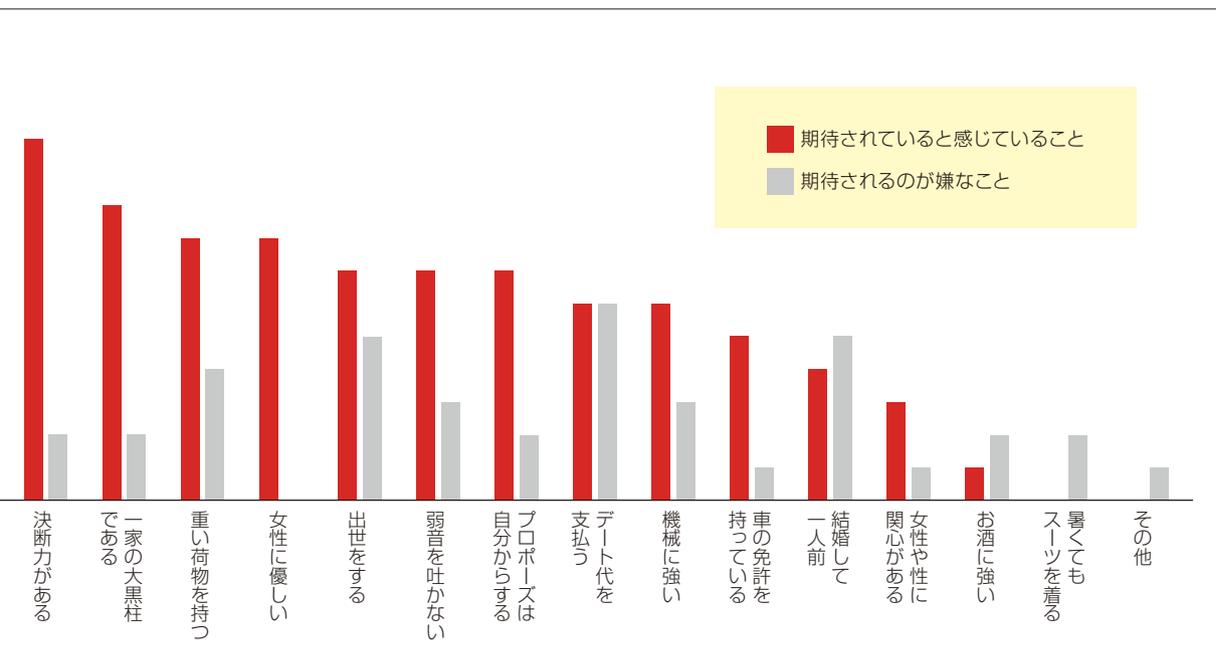
札幌に在住・通勤通学する20～30代の男性に、日々生活している中で「男性として期待されている」と思うことについてお聞きしました。

経済力がある

- 男性だから当然という雰囲気がある。(20代前半、正社員)
- 昔はそれで良かったかもしれないが、時代が違つと思う。(20代前半、契約社員／派遣社員)

正社員で働く

- 自分はより多く稼ぐこと、正社員として安定した生活を送ることよりも、自分のしたい仕事ができれば良いのだが、世間からは否定されることが多い。(20代後半、契約社員／派遣社員)
- 自分の生き方、働き方をとやかく言われるのは窮屈に感じる。自分に直接言われたことでなくても、耳に入ってくるだけでつっつっつしと感ずることがある。(30代前半、正社員)
- 自分の好きなスタイルで働きたい。(20代前半、正社員)
- 自分の働き方や生き方は自分で決めたいが、妻や母親は必ずしもそれをよしとしないと思う。(20代前半、公務員)



定年まで働き続ける

- 自分のタイミングで決めたい。(20代前半、正社員)
- 心変わりや、「もし」「たら」ればが許されず、追い込まれているように感じる。(30代後半、公務員)
- 子どもが成人してしまえば、後は自由に過ごして良いと考えている。自分の役割を全うした後は、人生を豊かにする趣味や学習に時間を使いたい。(20代後半、正社員)

一家の大黒柱である

- 「男性だから大黒柱」という固定観念が苦しい。男性でも女性でも働きたい人が働ける環境を作ってほしい。(30代後半、パート/アルバイト)

出世をする

- 今後人口が減っていく中で出世というのはより狭き門になっていくため、男性は出世して当たり前という風潮が強い。(30代後半、正社員)
- 自分らしく働く、ということに重きを置きたい。(20代前半、正社員)

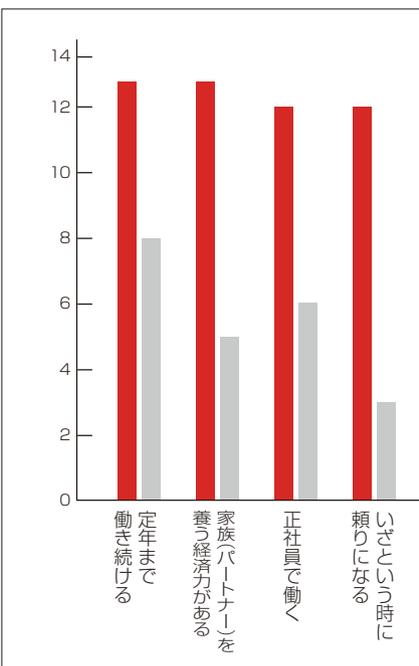
デート代を支払う

- 支払いが男性というのは、古いと思う。なぜそれが当然なのか理由が分からない。(30代前半、正社員)
- それを当然とする女性は嫌だ。(20代前半、正社員)



結婚して一人前

- 経済的に結婚のハードルが高いため、家族を養ってこそ一人前という風潮が強い。(20代前半、契約社員/派遣社員)



重い荷物を持つ

- 男性だから当然という雰囲気がある。(20代前半、正社員)
- 体力がないから嫌だ。(20代前半、学生)

弱音を吐かない

- 弱音を吐きたい時もある。(20代前半、学生)

お酒に強い

- 自分が全く飲めないため、期待されるのが嫌だ。(20代前半、正社員)



機械に強い

- 苦手なことを表明すると「男性なのに…」と言われる。(20代前半、正社員)

その他

- スポーツは世間話のネタとして役立つので、ある意味「一般常識」として重要かもしれないが、自分は興味がない。チームや選手、ルールも全く分からない。野球やサッカーのことを「男なら知っていて当然」という感覚で話されると、スポーツ好きではない自分が悪いのではないかと感じてしまいます。(20代後半、正社員)

「定年まで働き続ける」「家族(パートナ)を養う経済力がある」「正社員で働く」という働くことに関する項目が、上位に入っています。一方で、「いざ」というときに頼りになる「決断力がある」「女性に優しい」という項目では、多くの人が周囲から期待を感じながらも、その期待が嫌だと感じている人が少ない結果になっています。

前ページのアンケートから、札幌の男性は日々生活する中で「定年まで働き続ける」「家族(パートナー)を養う経済力がある」「正社員で働く」など、「働くこと」に関して、周囲から期待されるのが嫌だと感じていることが読み取れます。

内閣府の統計では、日常生活で不安や悩み、苦労、ストレスを抱えている20～30代男性の約7割がその原因として「勤務問題」をあげています。^{*1}

また、平成27年の自殺者数は男性が約7割^{*2}を占めており、自殺原因・動機として「うつ病」「仕事疲れ」「職場の人間関係」が上位にきていることから、男性と「働くこと」の結びつきの強さが分かります。^{*3}

さらに、仕事や職業生活での不安や悩み、ストレスについて、

女性の約8割が誰かに相談しているのに対し、男性は約6割にとどまっており、^{*4}女性よりも男性は悩みを相談できずストレスを抱えやすいと言えます。

世の中の風潮や固定概念として、男性自身が「定年まで働き続けるべき」「家族(パートナー)を養う経済力があるべき」「正社員で働くべき」など、「男性はこうあるべき」と思い込んでしまい、男性として生きることしんどさを感じている人が少ないのではないのでしょうか。

*1 「平成23年度自殺対策に関する意識調査」(内閣府)

*2 「平成28年版自殺対策白書」(内閣府)

*3 「平成27年版自殺対策白書」(内閣府)

*4 「平成24年労働者健康状況調査」(厚生労働省)



BUSINESS



草食系ビジネスマンのための
ストレスフリー仕事術

奥田弘美 著

1,200円(税別)／草思社

仕事を断らず、人の都合で働いている。空気が読めすぎて、主張を押し殺してしまふ。会社の役に立っていないと自分を責めがち。少し淡泊に見えるものの、優しく真面目で誠実な「草食系ビジネスマン」にあった働き方とは？ 穏やかな性格を「強み」に変える方法を提案する一冊です。

SOCIOLOGY



男が働かない、
いいじゃないか！

田中俊之 著

840円(税別)／講談社

「正社員として就職できないと人生終わりですか」「定時に帰ってもいいですか」「恋人がいないのは変ですか」。生きづらさを解きほぐす「男性学」の視点から、多くの若者が抱える悩みやあきらめについて考えます。朝起きて「会社に行きたくない」と思った方にぜひ読んで欲しいです。

COMIC



サラリーマン
山崎シゲル

田中光 著

1,200円(税別)／ポニーキャニオン

「机の引き出しにごはんギッシリ詰め込んだの 山崎君でしょ?」「フッフ 部長、2段目以降はおかずですよ。」とある会社の、とあるサラリーマン「山崎シゲル」が部長相手に繰り広げる日常を描いた一コマ漫画。シュールな世界観に思わず笑ってしまうはず。

PHILOSOPHY



ぐでたま哲学

サンリオ 著

1,000円(税別)／大和書房

やる気のない言動が特徴的なたまごのキャラクター「ぐでたま」。「花より布団」「郷に入ったらつぶされる」「早起きは三分の損」など、気持ちがいいほどやる気のない言葉は、厳しい競争社会を生きる現代人の本音を代弁しているかのよう。ぐでぐでたまごの、ゆるーい、がんばらない迷言に癒されること間違いなし。

りぶるのススメ

このページではセンター職員がおススメする本をご紹介します。

あなたのお気に入りになったら嬉しいです。

札幌エルプラザ情報センターを知っていますか？

札幌エルプラザ内にある「情報センター」では男女共同参画を含めた4分野の資料を閲覧したり借りたりすることができます(ご利用は無料です)。

🌙マークが付いているものは情報センターで借りることができますので、ぜひ遊びに来て下さいね。

情報センターへのお問い合わせは

011-728-1223

(開館時間 9:00~20:00)
(貸出時間 9:00~19:45)



札幌市男女共同参画センター相談窓口のご案内

札幌市男女共同参画センターでは相談窓口を開設しています。

相談料は無料です。各相談では専門の相談員がお話をお伺いし、秘密は固く守ります。

1人で悩まずに、新たな一歩を踏み出すきっかけとしてお話ししてみませんか。

	女性のための 総合相談	女性のための 仕事の悩み相談	女性のための 法律相談
日 時	月○○木○土 10:00～12:00 ○火○○○○○ 15:00～17:00 ※ただし第2火のみ 18:00～20:00	○○水○○○ 18:00～20:00	○○○○金○ ※ただし第1・3・4 第3 金 13:00～15:00 第1・4 金 18:00～20:00
相談員	カウンセラーなど(女性)	産業カウンセラー(女性)	弁護士(女性)
相談方法	面談/電話(728-1225)	面談/電話(728-1227)	面談
相談内容	家族のこと、夫婦のこと、恋愛、対人関係など女性の総合的な相談に相談員が面談または電話で対応します。	職場における対人関係、働き方、セクシュアル・ハラスメントなど、女性の仕事についての相談に産業カウンセラーが面談または電話で対応します。	離婚や相続など、法律적인見解が必要な女性の相談に弁護士が対応します。完全予約制なので事前にお電話でご予約下さい。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">予約受付電話: 728-1255</div>

●「君からモテたい、気づけ！僕たちのカン違い」
 ゲスト：渡辺大地さん(株式会社アイナロハ)
 パートナー間におけるすれ違いをテーマに、良好な関係づくりにむけた講座をおこないました。普段なかなか聞けないパートナーとの話を聞き、悩みがあるのは自分だけではないという気づきがありました。

●「定時退社(さよなら)の向こう側」
 ゲスト：吉川貫一さん(合同会社maturi)、
 田名辺健人さん(B・S・I)、谷口直樹さん
 (北海道テレビ放送株式会社)
 ゲストの仕事や退勤後の過ごし方についてお話を聞き、参加者同士でも退勤後の過ごし方について話し合いました。同年代のゲストスピーカーや参加者の働き方、考え方を
 知ることで、多様な生き方があると気づききっかけとなりました。



「メンズカフェさつぽろ」を開催しました！

結婚する・しない、子どもを産む・産まない、そして働く・働かないということを含めて自分の生き方を選べる女性と違い、男性は「働く」という選択肢を選ばざるを得ないことが多いように感じます。「男性はこういうものだ」と枠に当てはめることなく、自分が人生において何を大切にしたいか見つめ直すことで、今より少し生きやすくなるのではないのでしょうか。

編集後記

お問い合わせ | 札幌市男女共同参画センター事業係
 TEL: (011)728-1255 Mail: jigyou@danjyo.sl-plaza.jp

発行月: 平成28年10月

発行: 札幌市男女共同参画センター

【指定管理者:公益財団法人さつぽろ青少年女性活動協会】

facebook: <http://www.facebook.com/pages/札幌市男女共同参画センター/377759212234904>

所在地: 〒060-0808

札幌市北区北8条西3丁目札幌エルプラザ内

電話: (011)728-1255 FAX: (011)728-1229

ホームページ: <http://www.danjyo.sl-plaza.jp>



本誌のタイトル「りぶる」は、英語(ripple)で「さざ波」という意味です。男女共同参画の意識がさざ波のように、少しずつ広がって欲しいという想いを込めました。